

弥生時代の動物質食料

西 本 豊 弘

はじめに

- 1 縄文時代との相違
- 2 弥生人の食肉交換

3 生業と動物質食料の特徴

おわりに

論文要旨

弥生時代の生活は、農耕をどの程度受け入れるかによって、その地域毎に大きな差異があったと思われる。ここでは、稲作農耕が積極的に受け入れられたと推定される北九州から濃尾平野までの西日本の弥生遺跡を取り上げ、弥生時代における動物質食料について検討する。

西日本の弥生遺跡では、当初の段階から稲作農耕が行われたが、稲作だけではなくブタやイヌが新たに導入され、それを食べる習慣ももたらされた。それに伴って野生動物に対する狩猟活動が減少する。シカやイノシシも減少するが、タヌキやキツネ・ムササビなどの毛皮を目的とした中・小型獣の減少が顕著である。また、人口増加による食料不足と、それを解消するための食肉交換が行われたと推測された。

このように動物質食料も変化するが、ブタの下顎骨を儀礼的に扱うことや、シカ・イノシシ（ブタ？）の肩甲骨を用いた「占い」も行われた。西日本の弥生社会は、大陸からの渡来人によって大陸の農耕文化の全体系が導入されて成立したものであり、これまでの縄文社会とは世界観・価値観がまったく異なった社会であった。この価値観の相違を十分に認識した上で、西日本の弥生社会とそれ以外の地域の動物利用の相違を考えて行かねばならない。

はじめに

最近の考古学上の発見によって、縄文文化が一様ではなく、地域性と時代性が際立っていることが常識となってきた。それと同様に、弥生文化も一様ではないことは明らかである。弥生文化のイメージは、北九州や中国・四国・近畿・東海地方の弥生文化であることが一般的であり、北海道や沖縄は当然の事として、弥生時代の東北・関東地方の状況がどうであったかは、一般的にはあまり知られていない。それらの地域では、弥生文化が遅く伝わったり、近年まで農耕が行われなかった北海道のような地域もある。そこで、ここで述べる弥生文化とは、北九州から東海地方までの「西日本」の弥生文化を扱うこととする。

さて、弥生時代の生業や食料の問題・家畜などについては、これまでも何度か触れてきた(西本・大塚 1991, 西本1991など)。それらと重複する部分もあるが、現在の筆者の考えを二つの問題に要約して述べてみたい。まず、西日本における弥生文化の動物質食料を縄文時代一般と比較して、その特徴を明らかにする。そして、弥生人の中の食料の不均衡とそれに伴う食肉交換について考えてみたい。

1 縄文時代との相違

a. 狩猟活動の減少

縄文時代と弥生時代遺跡出土の主要な動物遺体の種名を示したものが表1である。この表で見ると、貝類も魚類・鳥類・哺乳類も縄文時代と弥生時代は同じ種を捕獲していたことが分かる。弥生時代も縄文時代と同様に狩猟・漁労活動を活発に行っていたように見える。それでよいのであろうか。確かに弥生時代も狩猟・漁労活動を行っていた。しかし、狩猟・漁労・採集活動が基本的生業であった縄文時代と比べて、稲作農耕が行われた西日本の弥生村落では、狩猟漁労活動が相対的に低下していたであろうことは、容易に推測される。表1ではその差異がなぜ出ないのであろうか。それは、表1は種名のみ記載であり、同じ日本列島の同じ地域で、縄文から弥生へと時間的に連続した時期に、ある程度の狩猟漁労活動を行えば、同じ動物を捕獲していても当然であるからである。問題はその内容である。狩猟・漁労活動の内容を考えるためには、種名の比較だけでは限界があり、出土量を検討しなければならない。そこで、狩猟活動の実態を考える資料として、縄文時代と弥生時代の主要な遺跡での哺乳動物の出土量を示したものが表2であり、それをグラフで示したものが図1である。弥生時代の遺跡の数が少ないが、これは各動物種ごとの最小個体数を推測するデータが示されている遺跡が少ないことによる。

さて、弥生時代の遺跡出土の哺乳動物の特徴は、図1でよく分かるように、シカ・イノシシ類(ブタ・イノシシ)・イヌの3種が多く、ノウサギ・キツネ・タヌキ・アナグマなどの小型獣が

表1 食料となった主要動物

種名	縄文時代	弥生時代
1. ハマグリ	◎	○
2. アサリ	◎	+
3. マガキ	◎	+
4. ムラサキインコ	◎	
5. タマキビ	◎	
6. アカニシ	+	+
7. アワビ	+	
8. ヤマトシジミ	◎	+
9. オオタニシ	◎	
1. イワシ	○	+
2. スズキ	◎	+
3. クロダイ	◎	+
4. マダイ	◎	○
5. ウナギ	◎	
6. サケ	○	
7. カツオ	+	○
8. ブリ	+	
9. マグロ	○	+
10. ヒラメ	○	
11. カレイ類	○	
12. マダラ	○	
13. フグ類	○	
14. コチ類	○	
15. サメ類	○	○

種名	縄文時代	弥生時代
1. ガン・カモ	○	○
2. キジ	○	+
3. ニワトリ		+
1. シカ	◎	○
2. イノシシ	◎	○
3. ブタ		◎
4. イヌ		◎
5. ノウサギ	○	+
6. タヌキ	○	+
7. キツネ	○	+
8. アナグマ	+	+
9. アシカ類	○	+
10. クジラ類	+	+

注. この表は、各時代の動物質食料の目安を示すために作成したもので、地域性は考慮していない。そのため、1地域に当てはめると矛盾することになる。多量・少量の区分は、感覚的なものである。
◎：多量 ○：ある程度出土 +：少量

少ないことである。イノシシ類としたもののうち、次節でも述べるように、西日本の弥生遺跡ではその50%から80%程度は家畜のブタであったと推測している。弥生時代のイヌは食料にもされているので、西日本の弥生遺跡では、イヌとブタの家畜がかなり多かったと推測される。狩猟活動はシカ・イノシシや小型獣を対象に行われたであろうが、動物遺体の多くがこれらのブタとイヌであったとすると、西日本の弥生遺跡での狩猟活動は縄文時代よりも生業活動に占める割合が小さかったと言えるであろう。縄文時代がフルタイムの狩猟漁労採集民であったに対して、弥生時代の狩猟活動はパートタイムの狩猟活動と言える。以上に述べたように、弥生時代の狩猟活動に関しては、遺跡出土の動物遺体の種名のみを羅列して、縄文時代と変わらないという議論がさ

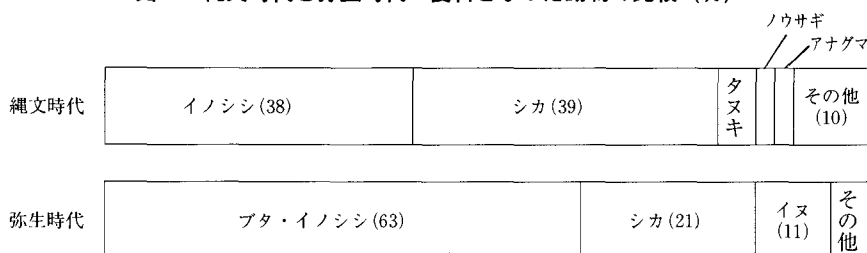
表2 西日本の弥生時代主要遺跡出土の陸獣類最小個体数

遺跡	ブタ イノシシ	シカ	イヌ	キツネ	タヌキ	アナグマ	カワウソ	オオカミ	サル	イタチ	その他
朝日	140	35	27	2	3	1	3	2	1		ノウサギ 1
菜畑	51	27	5		2	2					ムササビ 1
池上	60	17	5		1						テン 2
恩智	24	5	6							1	
亀井	63	20	20	1	1		2	1			
門田	43	25	5		1						
下郡桑苗	23	3	3							3	
宇木汲田	10	3	1						1		
計 (%)	414 (63)	134 (21)	72 (11)	3	8	3	5	3	2	4	4

注1. 朝日遺跡の内容は、西本他(1992)、西本(1994)による。

注2. 亀井遺跡の最小個体数はよく分らないが、一応推計した。

図1 縄文時代と弥生時代の食料となった動物の比較(%)



れることが多いが、見かけだけのデータで一般論を述べるのは慎むべきである。

ところで、鳥類狩猟については、弥生時代の遺跡では、ガン・カモ類が多いことが特徴である。また、ツル類もよく出土する。鳥類の内容は、出土量が記載された遺跡が少ないので、ここではこれ以上の検討は行わない。ツルとカモがあり、さらにスッポンかカメの骨があれば弥生時代の遺跡と判断するほどで、それらは低湿地での生業活動を示している。もっとも、縄文時代や江戸時代の低湿地遺跡でも同様の種類が出土するので、弥生時代のみの特徴とは言えない。

b. 漁労活動の活発性

弥生時代の漁労活動は、縄文時代と比較して活発であったか否かについて、研究者によって議論が分かれるであろう。貝類採取を含めた海岸部での漁労活動は縄文時代と変わらないし、低湿地での漁労や水田でのフナ・コイなどの捕獲や、瀬戸内海でのイイダコ漁を考えると、縄文時代よりも漁労活動の種類が多くなったとも言える。弥生遺跡でも貝塚を伴うことが多く、ハマグリやアサリなどの貝類も好んで利用した。しかし、縄文時代でみられるほどの大きな貝塚はほとんど見られず、小貝塚が多い。貝塚などに含まれるクロダイやスズキなどの魚骨も少ない。カメや

表3 ブタ、イノシシの部位別出土量と最小個体数に対する出土率 (%)

	朝日 (弥生)	伊川津	貝 島	鳥 浜	山武姥山	ホッテントットの村のヤギ
最小個体数	140 (280)	130 (260)	55 (110)	67 (134)	61 (122)	64 (128)
下顎骨	192 (69)	258 (99)	103 (94)	88 (66)	82 (67)	117 (91)
肩甲骨	95 (34)	60 (23)	116 (105)	49 (37)	51 (42)	35 (27)
上腕骨遠位部	89 (32)	40 (15)	54 (49)	61 (46)	66 (54)	82 (64)
大腿骨近位部	16 (6)	9 (3)	19 (17)	23 (17)	—	18 (14)
脛骨遠位部	38 (14)	31 (12)	48 (44)	40 (30)	47 (39)	72 (58)
踵骨	33 (12)	53 (20)	42 (38)	29 (22)	54 (44)	14 (11)

- 注1. 最小個体数は、下顎骨より計算し、その右側 () は、最小個体数の2倍の数量。
 部位の項の () 内の数字は、この数量に対する各部位の出土率を示した。
 2. 部位別の出土量は、左右を合わせたもの。表4も同じ。
 3. 山武姥山貝塚の大腿骨近位部位の数量は不明。表4も同じ。
 4. 朝日以外は縄文文化のの遺跡
 5. ホッテントットの村のヤギの残存率は、ブレイン (1981年) より転載。

表4 シカの部位別出土量と最小個体数に対する出土率 (%)

	朝日 (弥生)	伊川津	貝 島	鳥 浜	山武姥山	戸 井	コタン温泉
最小個体数	35 (70)	125 (250)	60 (120)	80 (160)	98 (196)	210 (420)	23 (46)
下顎骨	40 (57)	264 (106)	82 (68)	89 (56)	155 (79)	376 (90)	30 (65)
肩甲骨	34 (49)	75 (30)	115 (96)	105 (66)	52 (27)	231 (55)	35 (76)
上腕骨遠位部	49 (70)	61 (24)	75 (63)	70 (40)	143 (73)	157 (37)	21 (46)
大腿骨近位部	21 (30)	20 (8)	32 (27)	48 (30)	—	76 (18)	9 (20)
頸骨遠位部	18 (26)	93 (37)	82 (68)	84 (53)	97 (48)	202 (48)	19 (41)
踵骨	19 (27)	109 (44)	82 (68)	66 (41)	103 (53)	181 (43)	26 (57)

スッポンは、縄文時代と同様かそれ以上に食用とされたようである。このように、西日本の弥生遺跡でも漁労活動が活発であったことは確かであるが、生業活動の中での割合と食料をどの程度供給したかはよく分からない。大きな貝塚を形成した縄文時代の漁労集落よりも漁労活動は低調であったであろうと推測できるが、西日本の弥生集落での漁労活動の内容は、立地条件によってかなり異なっただろう。半漁半農的な村もあったかもしれない。

c. 家畜

i. ブタについて

弥生時代にブタが飼育されていることを1989年に指摘した。その後、北九州から関東地方西部までの8遺跡でブタが飼育されていることを確認した。そのうち、神奈川県の下田市池子遺跡は、野生のイノシシもかなり含まれていると考えているが、西日本の各遺跡と東海地方の朝日遺跡では、イノシシ類のうち、50%から80%程度はブタであると思っている。これらの遺跡でも野生のイノシシが混じっている訳であり、シカ狩りと同様にイノシシ狩りも行われたであろう。このため、遺跡出土のイノシシ類にはブタとイノシシがありそれらの分類が問題となる。一般の人にとって、ブタのイメージは鼻の短いブタであろうが、弥生遺跡から出土するブタはイノシシとよく

似ているので、現在でも弥生ブタを認めない研究者も多い。イノシシとブタを分ける根拠を示すことは、ブタの存在を主張する筆者の義務であるが、本論で議論すべきではないので別の機会ですらに行いたい。

以上に述べたように、西日本の弥生遺跡では確実にブタが存在しており、東日本以北では、ブタは出土していない。これは、弥生文化の伝播の仕方やその内容に大きく関係しているのではないかと考えている。すなわち、少なくとも水田稲作農耕が維持された地域にはブタも入ったが、そうでない地域では飼育されなかった可能性があるのではなからうか。弥生文化を受け入れても稲作が行われず畑作のみの地域や、畑作もほとんど行われなかった地域では、弥生文化のすべての文化要素が生活に取り入れられたとは考えられない。ブタも、その例外ではなかったであろう。

さて、西日本では、ブタの飼育数はかなり多かったと推測しているが、食料としてはどの程度の貢献をしたであろうか。これは、まったく推測の域をでない。ブタの大きさにもよるが、体重100kgのブタとして、肉量は60kg程度である。1家族(数人)で1回に1kg食べるとして、60回分である。1年間の平均6日に1回のブタ肉となる。1回に500gとすれば、3日に1回のブタ肉料理である。ブタ以外のシカやカモ類、魚類もあるので、6日に1kg程度のブタ肉で十分ではなからうか。この計算では1年間に1頭程度ということになる。もちろん、ブタが家族単位で飼育されて、家族で消費されていたかどうかは分からない。また、農耕儀礼をはじめとした様々な儀礼に利用されたであろう。集落の大きさや性格にもよるが、大きな拠点集落でも、1時期に飼育されていたブタは数十頭程度であろう。

ii. イヌについて

縄文時代のイヌは狩猟用であり、基本的には食用とされず、死ねば埋葬された。弥生犬は狩猟にも用いられたであろうが、埋葬された例はなく、解体痕のある骨がばらばらに出土することから、食用にされたと思われる。イヌを食べることは稲作農耕では普通であり、この習慣は日本でも最近まで行われていた。弥生犬は、渡来人によって朝鮮半島を経て持ち込まれたイヌであり、縄文犬と混血し、徐々に縄文犬が消滅していったと考えている。イヌは弥生時代以降、様々な品種が持ち込まれ、食用とされたり愛玩犬とされた。

さて、弥生犬の食料としての評価であるが、1遺跡当たりの出土量がシカに匹敵するほど多いので、ある程度の比重を占めていたと思われる。日常的にも、儀礼の時にも食用とされたであろうが、利用の程度については、具体的には分からない。

iii. ニワトリについて

ニワトリを表現した木製品や土製品が出土しているので、ニワトリの骨も弥生遺跡から出土するのではないかと期待していたが、現在のところ長崎県唐神貝塚・原ノ辻遺跡・福岡県酒見貝塚・塚崎東畑遺跡・愛知県朝日遺跡の5遺跡で知られるだけで、出土量も少ない(西本 1993b 他)。筆者は、弥生人はニワトリもその卵も食べていると推測しているが、このように出土量が少ないことは、時を告げる鳥として大切に飼育されて、あまり食用とされなかったのかもしれない。

なお、家畜のウマとウシについては、弥生時代に渡来していた可能性が高いが、確実に弥生時代のものとされる資料は知らない。

2 弥生人の食肉交換

筆者は最近、縄文人の間の食肉交換の可能性について考えた（西本 1995）。そのきっかけは愛知県渥美町の伊川津貝塚の1992年度の発掘で出土したイヌであった。縄文晩期終末期の遺物包含層から出土したイヌのうち1体の形質が弥生的であったために、伊川津人が弥生人からイヌを手に入れたのではと考えたのである。その場合、縄文人から弥生人へは食肉が渡されたのではと想像し、骨の部位ごとの出土量で、肉の交換が考えられないかと思いついた。その前提として、縄文人の社会ではどうかという発想であった。その結果、縄文人の間でも食肉の交換があった可能性に気が付いたのである。また、その時、伊川津貝塚人の交易相手と想定した遺跡は朝日貝塚であったが、朝日貝塚の骨の出土量の偏りは、伊川津を補完するものではなく、まったく別のパ

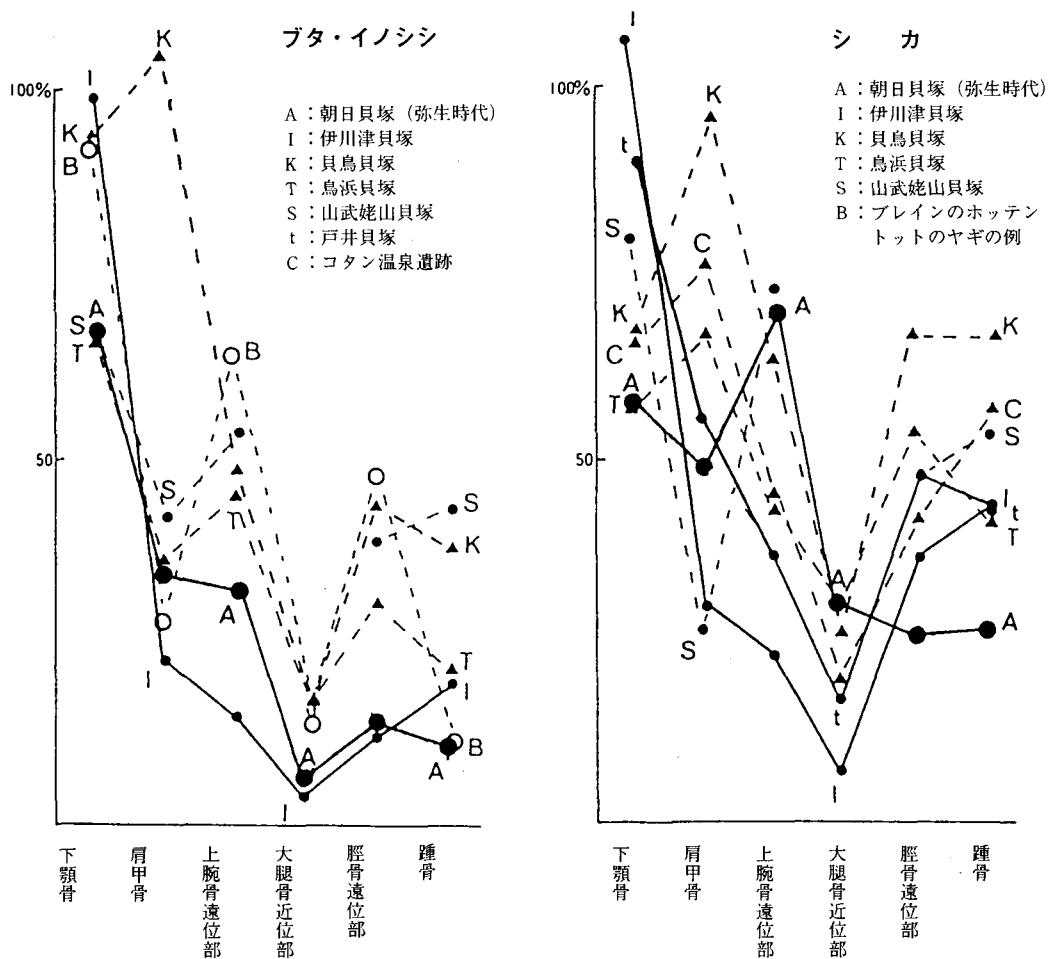


図2 部位別出土率の比較

ターンであった(図2)。即ち、図2の解釈は、シカは朝日遺跡人が捕獲して自分で消費するパターンを示すのに対して、ブタは縄文の拠点集落のように、肉が出て行くパターンを示すのであった。シカやブタの肩甲骨が少ないのは、占いに利用されたためと考えられるので、部位別出土量の出土率は縄文遺跡とすべて同様の基準で考えられないことも明らかになった。しかし、ブタの肉が弥生遺跡から出て行くとは想像していなかった。その解釈に苦しんだのであるが、朝日遺跡に関する講演会の機会に、このことを話したところ、愛知県の埋蔵文化財センターの宮腰健司・石黒立人・服部俊之氏などから教示を得ることができた。それは、朝日遺跡はその地域の拠点遺跡であり、朝日遺跡で市などが開かれていて、朝日遺跡が物資の流通の拠点であった可能性であった。もしそうであるとすると、弥生遺跡の間でも食肉の内容が異なり、食肉交換を想定しなければならない。遺跡出土の骨の意味が、その遺跡で食料になった動物のすべてを意味しないとなると、弥生社会の食料事情を考えることは、ますます複雑となる。

3 生業と動物質食料の特徴

a. 生業の多様性と生産性の増大

弥生時代は、縄文時代に比べて狩猟・漁労の労働時間は少なくなったが、水田稲作や畑作などの農耕活動が加わることによって、生業活動全体の多様性が増大した。この農耕による多様性は、縄文時代の植物質採集活動を農耕が肩代わりしただけであるという意見もあるかもしれない。しかし、採集活動と農耕の決定的な相違は、当然のことであるが、気候などの影響を大きく受けながらも、人の労働による耕作地を増加することによる生産性の向上にあった。その結果、動物質食料の質的変換とともに、植物質食料の増産が実行されたと推測される。もっとも、縄文時代もかなり植物質食料の比率が高かったと考えられるが、縄文と弥生の違いを量的に検討するデータは現在のところ得られていない。

b. 生業の季節性

生業活動の季節性については、生業全体の中で農耕活動がどの程度であったかが問題となる。まず稲作を主体とする農耕活動は、春から秋の農繁期と冬の農閑期の2時期に大きく分けられたであろう。そして、その節目である春と秋に農耕儀礼が行われた可能性が高い。狩猟活動は冬の農閑期に主に行われ、その規模も小さくなったであろう。欠乏する動物質食料を補う手段としてブタやイヌが飼育され、また一方では漁労活動も海岸部の集落では盛んに行われたと推測される。漁労活動の時期については、対象魚の回遊時期などと関連して、様々な時期に行われたであろう。縄文時代では自然の資源に多く依存したため、秋から冬にかけての植物質食料と動物質食料の獲得がもっとも重要な生業活動であったが、弥生時代になって、春から秋にかけての稲作農耕主体

の生業活動へと変化した。弥生時代も縄文時代と同様に労働の季節性が見られるが、その季節が異なり、しかも集約性が高くなったと推測される。また、縄文時代でも栽培植物が存在しており、ある程度の農耕が行われていたが、弥生時代の西日本で行われた稲作農耕は、生業活動としての地域毎の差異が少なく、斉一性が強いことも特徴である。その結果、米を主食として1年中同じものを食べる習慣が弥生時代に始まったといえることができる。

c. 生業活動の実態

以上の議論を総括すると、西日本のみの動物質食料の問題を取り上げたとしても、弥生時代の社会は単純なものではないことは明らかである。弥生時代の実態は、半農半猟的生活や半農半漁的生活が主体であったと思われる。また、弥生時代になっても、縄文的狩猟漁労採集生活を行うグループもいたであろう。その集落ごとに、生業活動の比重はかなり異なっていたことが想像される。米をはじめとする農作物が食料において徐々に比重を増していくであろうが、そのプロセスは弥生文化の拡散と同様に時代性と地域性を考慮しなければならないであろう。

d. 問題点

問題点としては、米や畑作物による人口扶養力の増大とそれに伴う動物質食料の不足である。その結果としての農耕作物への依存度が増大し、天候不順などによる不作と飢饉のおそれが生じる事となる。これは、縄文時代には見られなかったことであり、農耕社会特有の現象である。この農耕の弊害は、米作への傾斜が特に激しくなった江戸時代に顕著となり、大きな飢饉を招く事となったのは周知の事実である。弥生時代は、江戸時代ほど米作農耕に集約化されていなかったであろうが、当時の技術では、土地によって農耕生産力が大きく左右されたと思われる。その差異が貧富の差異を増大し、社会的緊張を増大させたであろう。

おわりに

弥生時代の典型的地域としての西日本の弥生遺跡の動物質食料の問題を中心に論じてきた。その結果、これらの地域では、農耕活動に狩猟・漁労活動を加えた生業活動が行われていたこと、それぞれの生業活動の比重が集落ごとに異なっており、集落間の食料を含めた交換が行われていたことを考えた。ごく常識的の見解であり、これまでの弥生文化観と大きく変わらない。しかし、これは、はじめにも述べたように、西日本に限ったイメージである。南島や関東地方以北では、別の生活体系が行われた。それが、生業活動の内容の相違だけに起因するものか、社会・文化的な相違によるものかなど検討すべき問題である。今後の課題としたい。

文献

- 阿部みき子 1980「恩地遺跡出土の獣骨」『恩地遺跡Ⅰ 本文編』瓜生堂遺跡調査会
石川日出志 「弥生時代の季節性」『日本村落史講座 6 生活Ⅰ 原始・古代・中世』雄山閣
金子浩昌・牛沢百合子 1980「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡 第6分冊 自然遺物編』大阪文化財センター 9～32頁
金子浩昌・牛沢百合子 1982「亀井遺跡出土の動物遺存体」『亀井遺跡』大阪文化財センター 183～204頁
金子浩昌・和田晴吾 1988「狩・漁」『弥生文化の研究 2 生業』141～161頁
木村幾多郎 「宇木汲田遺跡の動物遺存体」
高橋信武 1989「まとめ」『下郡桑苗遺跡』大分県教育委員会 77～82頁
西本豊弘 1989「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡』大分県教育委員会 48～61頁
西本豊弘 1991「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集 175～194頁
西本豊弘・大塚昌彦 1991「衣・食・住」『日本村落史講座 6 生活Ⅰ 原始・古代・中世』雄山閣 92～108頁
西本豊弘 1992「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡Ⅱ』大分県教育委員会 92～110頁
西本豊弘 1993「弥生時代のブタの形質について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集 49～60頁
西本豊弘 1993「弥生時代のニワトリ」『動物考古学』第1号 45～48頁
西本豊弘 1995「動物遺体」『伊川津遺跡 1992年度調査』渥美町教育委員会 76～81頁
林 謙作・西本豊弘 1986「縄文晩期～弥生前期の狩猟と儀礼」『環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲・配分・儀礼』昭和60年度科学研究費補助金(一般A)研究成果報告書(研究代表者 大井晴男) 26～42頁
春成秀爾 1990「弥生時代の始まり」東京大学出版会
松井 章 1986「亀井遺跡(切り広げ部)出土の動物遺存体の分析」『亀井 その2』大阪文化財センター 423～494頁

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

Meat Consumption in the Yayoi Period

NISHIMOTO Toyohiro

It is thought that life in the Yayoi Period differed from area to area according to the extent to which agriculture was practised. This paper considers those Yayoi Period sites in western Japan where rice agriculture seems to have been most actively practised—that is, the area from North Kyushu to the Nobi Plain—in an effort to investigate the consumption of meat at the time.

The cultivation of rice seems to have been carried on in the Yayoi sites of western Japan right from the beginning of the period. Apart from rice, however, pigs and dogs also entered Japan, and so did the habit of using them for food. Concurrently, hunting for wild animals declined. There was a decline in deer and wild boar remains, but also a marked decline in the remains of those small and mid-sized animals which, like badgers, foxes and flying squirrels, would have been prized for their pelts. At the same time we may conjecture that meat would have been eaten to counter food shortages brought on by population increase.

Together with this change to meat consumption, the lower jawbones of pigs came to be used in religious ceremonies, and the bones of deer and wild boar (perhaps pigs) used for purposes of divination. Yayoi society in western Japan was characterized by its acceptance of the cultural life of those people who had brought agriculture with them from the Asian mainland; it embraced a world view and system of values far different from those of Jomon society. More attention must be paid to how different they were, and how the use made of animals in the Yayoi society of western Japan differed from elsewhere.